

を無理に守らせようとして、権威をつくろうとする流れは、学校特有のものだと思う。この流れを変えないと、どんどん生徒はやめていくと思う。決まり決まりというが、理由のないような決まりもある。決まりを守らせる意義を説明してほしい。おかしな決まりなら、その時点で、みんなで考えルールを改定していく。これが一般社会の常識だと思う。俺たちが高等学校を中途退学し、社会からそういったことを学んでくるようでは、学校の存在価値って何なの?と問い合わせたくなる気分である」

事例 5

問題行動により中途退学していったE君

※「」はE君、<>は教師の発話である。

(1) 中途退学の時期・理由

「中途退学したのは高校2年の10月である。交際していた彼女が妊娠し、その責任をとる形でやめた。同じ高校に通学していたため仕方なかった。彼女は、自分だけが中途退学して、俺を高校に残そうしてくれた。だから、彼女は、担任教師に妊娠の事実を伝え、自分がやめるつもりだった。しかし、彼女の担任教師は、<相手は誰なの?>と、しつこく迫ってきた。俺たちがつきあっているのを知っていて、追及してきた。彼女も否定し続けたが、担任教師は、<もしも、相手がE君でも内緒にしておくから安心して>といってきたため、その言葉を信じて真実をいった。すると、俺が教頭に呼ばれ、事実を追及され、責められた。とうとう、2人とも依頼退学するようにという指示が出た。それに従うほか選択肢がなかった」

(2) 中途退学を決意したときの気持ち

「(彼女の担任教師や学校側に)裏切られた気分だった。確かに俺たちが悪い。やめなければならないのなら、最初からそういう説明をしてほしかった。怒りでしばらくは興奮していた。彼女だけやめようというのは、両家で相談し、合意の上のことだった。その判断が正しいとは思わない。先生の立場も分かるが、騙すようなことはしないでほしいと思った。学校というところは、正しい考え方を教えてくれるところだと思った。両家を前にして教頭が<皆さん、これが2人にとって、最高の選択肢ですよ>といった時、怒りが頂点に達した。勝手に人の気持ちを決め付けてほしくなかった。学校にとって最高の選択肢だろ!」